

日本は 2007 年に高齢化率が 21%を超え、超高齢社会となった。また、2015 年には高齢化率が 25%を超え、実に国民の 4 人に 1 人以上が高齢者という状態にある。そして今後もさらにその割合は増加していく見通しとなっている。

長寿自体は喜ばしいことであるが、急速な高齢化と共に高齢者の QOL や ADL の低下、平均寿命と健康寿命の大きな差、その間の介護費用・老人医療費の増大などの様々な問題も生じている。

そのような状況の現代において、歯科に多方面から注目が集まっている。口腔機能を向上もしくは維持することが全身のフレイルに良い影響を与えることが分かってきたからである。口腔機能を低下させないためには、やはり歯を失わないのが 1 番であるが、残念ながらあまり機能しているとは言い難い義歯が散見される。機能的な義歯を提供することは患者の口腔機能だけでなく QOL や ADL の回復の手助けにもなるため、超高齢社会において日々必要性を増している。

義歯に限った話ではないが、欠損補綴処置を行う目的は欠損を埋めることではなく、歯の欠損による口腔機能低下を補うことであり、そのためには患者個人の口腔機能を把握したうえで行うことが重要であり、特に高齢者にとってはそれが要となる場合が多い。

今回は、超高齢社会において歯科に求められている口腔機能に対する知識について、口腔に調和した機能的な義歯を製作することの重要性とその手法や注意点についてなどを、論文や症例を提示しながら説明したい。それにより皆様の日々の臨床が益々充実し、地域の義歯使用高齢者の口腔機能向上に繋がればと考えている。